

- 「ゆらぎ」があるとは、「すきま」があるということだし、「決まっていないこと」がある面白さなのではないか。以前、幼稚園を卒園した子どもが小学校が始まって1週間ほどした後に遊びに来たことがある。「小学校はどう？」と聞いたときに、「小学校は簡単やで。全部やることが決まってるから」と答えた。この言葉をどう考えるかが大事ではないか。
- 実際の保育現場では月案・週案の共有や市町への提出など、計画性やカリキュラムの遵守が強く求められる現状がある。そのため、自由に子どもの姿に合わせて保育を展開したいという思いと、計画に基づいて進めなければならない現実との間で揺れ動く難しさも実感した。
- 新任の教師としては、教科書なしに迷いながらつくっていくカリキュラムは不安だ。でも、「問い」が示されることや、間違いや失敗を受け止めてもらえる環境があれば、少し不安が軽くなる。
- 保育の中でもよく使われる「寄り添う」や「共感する」というのは、子どもたちの「問い」に向き合うということから始まるのではないかと感じたとともに、保育者自身も自分の保育や子どもとの関わり方に問いを立てて、振り返ることが重要になると感じた。
- 臨機応変な保育をしていきたいが、たくさんの子どもの相手をそれができるかが不安だ。10人くらいまでならできる気がするが、30人ではできない。
- カリキュラムが柔軟であることも大事だし、カリキュラムが暮らしのなかで重ねられていくことも大事なのではないか。夏野菜の水やりを一律のやり方で子どもにやらせている園では、野菜とのかかわりが機械的になっていたが、野菜の様子を見ながら子どもたちが水やりの仕方を考えている園では、子どもたちは太陽を見上げたり土を触ったりして野菜がどれだけ水を欲しがっているかを感じながら水の量を調整していた。過去の経験が生きるような仕方で学びを考えていくことが大事なのではないか。
- このような自由なカリキュラムだと、放任になったり、保育者の経験によって差が出たりする不安がある。
- 保育者の感性や経験、考え方の多様性を生かすような工夫が必要。お互いの「子ども理解」を重ねあうことで、多様な視点で保育が共創できる。
- 子育て支援でも、主体性を発揮して議論をする、というのが民主主義と似ている。サービスを受けに来ている方もある程度いる。そこに安心して自己発揮してもらえたり、何かを決めたりできると民主主義になるが、サービスを受ける立場の方の方が多い。責任を負いたくない、逃げたいという考えもある。それもわかったうえでの「安心」が大事だと思う。
- 最近困ったこととして、保護者の茶話会で、「保護者が参加できるイベントがもっとほしい！毎月やりたい！」となった。上司は「いいね！」と言ったが、保育者は「え！？毎月！？」となった。誰かに負担が行くこともある。統率するリーダーシップを発揮する人も必要。
- 子育て不安は生活不安。どの世代も不安がある。不安なく生活ができること。自信を持てるための暮らしの保障。もっと具体的に生活に落とし込めるビジョンが必要。保育は制度で成り立つ。格差や立場を超えて目指したいものを可能にする制度をつくるべき。